

### 【心とは裏腹な身体～その3～】

「いっしょにいたい」のに「かえれ～」と叫んでしまい、「好き」なのに「きらい」と言ってしまうKさんの支援は、パフェ作りをするというKさん+同年代の女性職員2名の女子会の開催からスタートしました。彼女はすでに30才、入所してから10数年の月日が流れていますが、おそらく「好き」を支援職員に向けて伝えたのは初めてのことだと思われれます。

「好き」を伝えることは、重度の知的障がいの方、またそれに加えて強度の行動障がいを呈する方にとって、それはそれは困難をとまなう大仕事になると思われれます。

毎日、毎日、多くの方々のお世話になり、ひとたび行動障がいを呈すれば、多大な迷惑と負担をかけていると主観的に感じているAさんにとって、「好き」を伝えることのリスクは相当に大きいものがあります。

なぜならAさんの心の中は、「どうせ嫌われている」という気持ちで渦巻いてますから、「好き」という勇気を出して伝えたポジティブなメッセージの見返りが心を大きく傷つけるネガティブなメッセージ、「嫌い」とであるとすれば、人というものは、「好き」を伝えるよりも、どうせ嫌われているなら「嫌い」を伝えることを選択する生き物だからです。

豊かな人生を歩むための心的なエネルギーは、ポジティブなアプローチにポジティブな応答が返る時に得ることができます。例えば、初デートに思い切って誘ったときに、即座に快諾の返答が返ってくるというように。

ネガティブな応答が返る率が高いとき、人は自分の心が傷つけないために、まず、ネガティブなアプローチをするものです。そのネガティブなアプローチにはネガティブな返答があるに決まっていますから、「ああ、やっぱり私は嫌われているんだ」と変な安心感を得ることができて、心は傷つかないわけです。また、悲しいかな、ネガティブな行動は、簡単に関心や注目だけは得ることができますから、一回その快感を味わってしまうとなかなか止めることができなくなります。「好きだと伝えたいのにつねってしまう」→「やめてよと怒られる」→「ヘラヘラ笑っている」→「悪いことしてわかってるの？とさらに怒られる」というようなネガティブな連鎖が生じます。でも関心を集めている快感がありま

すから、ヘラヘラ笑ってしまうに違いありません。

この困難性の中で、支援の専門性はネガティブなアプローチに対してポジティブな応えを返すという、ウルトラ変則技になります。

「好き」という感情は、人生に豊かさを与えます。それは、「好き」はつながりを生む言葉、行動だからです。パフェ作りの女子会の後、Aさんの「かえれ～」と「夜勤者は〇〇さんです」は、すっかり無くなりました。彼女は女子会で、人生で初めて家族以外の対人関係の中で、つながりを感じることができたのでしょう。

しかし、＜心と裏腹な身体＞は簡単なことでは治りません。

今度は、KさんはメンバーCさんの名前を何回も大きな声で何回も叫んだり、座っている椅子を蹴ったりということを始めました。Cさんも「Kさんきらい～」と大パニックです。まさにネガティブにネガティブが返る修羅場です。しかし、ここでも支援は、CさんにKさんといっしょに大好きなプリンを食べようという提案でした。

今やKさんの人生のテーマは「好きを伝える、広げる」ことにありました。きっとKさんは、支援職員との女子会で得たつながりの感動を次はCさんに向けたのです。Cさんはちょうど亡くなった父親の年令に近い男性で、「好き」伝えるのには絶好のターゲットです。つまり女子会で「好き」を伝えることに自信を得たKさんは、その得たポジティブなエネルギーを今度はCさんに向けたというわけです。

重度の知的障がいの方にとって、〇〇ができるようになるといった年令軸にそったいわゆる常識的な発達概念である＜縦＞の発達の道を歩むことは困難が伴います。彼らが幸せになるために歩むべき道は、それに反して＜横＞の発達を目指すべきです。そして＜横＞の発達とは、人間関係の豊かさ、それはたくさんの方のつながりの中で生きる道ということになります。他ならぬその道は「好き」を伝えることにあります。

このように、行動障がいのある方が「心と裏腹な身体」を抱えて「好き」を伝えるためには、心と身体が必ずしも一体的ではないことを熟知している専門的な支援者の存在が必須になるのです。